

日本人学生・留学生混在型 「多文化コミュニケーション」の授業運営： 実践報告

クロス尚美

n. cross@gm. himeji-du. ac. jp

【要約】

本実践報告は、留学生と日本人学生が混在するクラスで、互いの文化を知り、文化の違いからくる様々なコミュニケーション形態を学び、双方にとって有益なコミュニケーション力をつけることを目的とした合同授業運営の試行錯誤の様子をまとめたものである。

1. 背景と目的

インターネットや SNS の利用は、個人生活に限らず、大学教育においても拡大傾向にあり、学生が人との直接対話に費やす時間は減少傾向にあるようだ。最近の学生は「話さない」、「交わらない」と言われる。国語教育で読むことと書くことのみが強調され、聞き取り、話すことは含まれていない（沖塩・益井・北本 2008）ことも、その一因であろう。

日本人学生の内向化が懸念される中、日本の大学に進学する留学生数は、2008 年の「留学生 30 万人計画」（文部科学省）以来、増加の一途をたどる。日本の大学は確実にグローバル化している。大学において多文化共生が必然である以上、相互理解を深めるために不可欠な日本語によるコミュニケーション能力の育成、向上もまた必要不可欠といえる。これは、日本人学生、留学生に共通している。ところが、英語による多文化コミュニケーション（田崎 2003、宮本 2011 など）が注目を集める反面、日本語によるコミュニケーション能力育成（長谷川 2007 など）については、まだ十分に研究、調査がなされているとはいえないのではないだろうか。

多文化コミュニケーションの授業を担当するにあたり、事前にアンケート調査を行ったところ、学生たちは、話したがっている、知りたがっている、考えたがっているということが明らかになった。しかし、相互のコミュニケーションの場が少ないことも分かった。大学内には大勢の留学生がおり、また留学生は大勢の日本人の中にいながら、互いに出会いの場、話をするきっかけがつかめないと訴える。親しい友人はサークルや部活、ゼミのクラスメートに限られ、たまたま所属が同じでない限り、多文化間のコミュニケーションを図る機会は少ない。

留学生の日本語によるコミュニケーション能力の向上を目指し、日本人学生がボランティアとして多文化理解の活動に参加する事例は多数報告されている。本稿で取り上げている実践例の特徴は、日本人学生と留学生が、同じ授業を受けながら互いの文化的背景を知り、多文化をつなぐ日本語によるコミュニケーション能力を高めようことを目指しているところにある。国語のクラスでも日本語のクラスでもない、日本人学生と留学生とが同等に混在する合同授業である。

2. 「多文化コミュニケーション」の概要

多文化コミュニケーションの授業の概要を、授業の流れ、受講生のプロフィール、授業で取り扱ったテーマ、評価の仕組みの4項目に分けて紹介する。

2-1. 授業の流れ

大前提として、この授業は留学生のための日本語クラスではないことが挙げられる。この授業では国語力、日本語力を問うのではなく、コミュニケーション力を高めることが目的である。文法の不確かさよりも、どれだけ言いたいことが伝えられ、相手の言いたいことを聞き取れるかが焦点となる。多文化コミュニケーションはIとIIよりなり、それぞれ1コマ90分、週一回、15週間で完結する科目である。多文化コミュニケーションIとIIは、2年次以降の学生を対象に、同年の前期と後期に開設される。

授業はワークショップ形式で行われる。小グループあるいは全体でディスカッション、1分-3分間のスピーチ、質疑応答からなる。小グループの場合は、構成員を3人から5人とする。その際、日本人学生と留学生の比率を、なるべく均等に割り振るようにした。小グループの顔ぶれは、1回の授業で2~3回変わるようにした。グループごとに2人選び、1人が時計回り、もう1人が反時計回りで移動する。回を重ねるうちに、移動が短時間でスムーズに行えるようになった。小グループの顔ぶれを頻繁に変えることで、各自が同じ話をリピートする必要性が生じ、リピートによって話がまとまることが期待される。

ディスカッションをしながら、あるいはクラスメートのスピーチを聞きながら、ノートテキングを行う。ノートテキングには、後述するワークシートを使用する。

知らない人（クラスメートはこの分類になるようだ）と話すことに苦手意識を持つ学生は多い。授業の一環として、改まって話をする場合は尚更である。最初の言葉が出ないという学生のために、簡単なスタイルシートを用意した。

スタイルシートの例

「私は、～について発表します」

「〇〇さんは、～と言いましたが、私は・私も～」

「私たちは～について話し合いました」

「～や、～という意見もありましたが、私は～」

また、ビジネス場面で使われる「マジックナンバー3」を紹介し、自分の話したいことを3つのポイントにまとめることを徹底した。3つにまとめることで、記憶に残りやすく、理解しやすいという利点がある。また、スタイルシート同様、フォーマットに従うことで作業が単純化され、苦手意識から解放されやすい。

授業開始時にワークシート（振り返りレポートを兼ねる）を配布する。このワークシートには、次に挙げるタスクに用いた。振り返りレポートと自己評価のために、授業の最後の5分をあてた。

ワークシートのタスク

当日のテーマについて、話したいことを3点にまとめる

クラスメートの話聞いて、メモを取る（ノートテキング）

振り返りレポートとして、当日学んだこと、知ったこと、考えたことをまとめ、どのくらい「聞く」ことと「話す」ことができたか、10段階で自己評価する

授業中、スマホで言葉の意味や文化的背景などを調べることを奨励した。2013年度に1例あったほかは、認められた用途以外のスマホの不適切な使用はみられなかった。授業中にワークシートを完成させなくてはならず、そのためには集中して「聞く」「話す」ことが必要なためだと考えられる。

2-2. 受講生のプロフィール

履修する学生は、日本語教師または国語教員、あるいはその両方をめざす学生にとっては必修であるが、その他の学生にとっては選択科目のひとつとして設定されている。通常2年次に履修するが、4年次まで履修可能となっている。

表1 受講生数

年度	日本人	留学生	合計
2013	16	12	28
2014	23	7	30
2015	6	13	19

2013年度から2015年度に受講した留学生の出身国は、中国、韓国、マレーシア、ベトナム、タイ、ネパールである。

留学生の日本語レベルは、N1既得者のグループと、N2取得後の日本語学習歴1年以上のグループに分けられる。留学生はほぼ全員が日本語専攻であり、多文化コミュニケーションは必修科目である。

2-3. 授業のテーマ

授業の大テーマを「誤解」とし、各週の小テーマを設定した。2013年から2015年に扱ったテーマは、下記の通りである。

各週の小テーマ

- 自己紹介（これまで人に話したことのない自分情報を一つ以上入れること）
- 思い出（後に誤解だったと分かったこと）
- 家族・友達（求めること、与えたいこと）
- 恋人・結婚
- 地域社会（ふるさとについて）
- 大学（学生生活、教育機関としての大学について）
- 日本・日本人について思うこと
- 宗教

2-4. 評価の仕組み

学生の評価は、毎回のワークシート・振り返りレポート提出と、最終日のスピーチを行うことで100%とする。

表2 学生の評価

自己紹介（第1週）	10%
振り返りレポート（14週）	70%
最終回スピーチ	20%
<hr/>	
	100%

振り返りレポート（ワークシート裏面）は、毎回授業の終わりに提出する。自己評価を含め、全タスクについて記載があることを確認する。無断欠席（レポート提出なし）は、マイナス10ポイント、未完のワークシートはマイナス5ポイントとする。60%以下は不可とする。自己紹介と最終回スピーチは、参加することでそれぞれ10ポイント、20ポイントを付加する。

3. 結果と分析

個人情報と研究資料として利用するにあたり、受講生全員から調査協力承諾書をとった。しかし、履修学生数が少ないことから、国籍や学年などで人物が特定される可能性があることを危惧する声があり、特にインターネット上に公開する場合には匿名性を担保する配慮を約束した。

3-1. 事前調査

前年度、前々年度の結果を踏まえ、2015年度は授業開始時にアンケート調査を行い、「話すこと」に対して履修者がどのように感じているかを5段階で評価させた。

事前アンケート調査項目

人と話すことが好きだ	強くそう思う	5	4	3	2	1	全然そう思わない
大勢の前で話すことが得意だ	強くそう思う	5	4	3	2	1	全然そう思わない
人の話を聞くことが好きだ	強くそう思う	5	4	3	2	1	全然そう思わない
色々な文化について知りたい	強くそう思う	5	4	3	2	1	全然そう思わない

人間関係の親疎に関わらず、人と話すことが好きだ（評価5と4）という日本人学生は、6人中4人（66.7%）であった。しかし大勢の前で話をするのが得意だ（5と4）と答えたのは1人（16.7%）で、4人（66.7%）は強い苦手意識（2と1）を持っている。知らない人と話したいかという質問に対しては中立（3）が多かった。しかしながら、全員が他の文化について知りたい（5と4）と答えた。他の文化について興味はあるが、積極的に話をしようという姿勢はみられなかった。留学生13人のうち、人と話すことが好きだ（評価5と4）と答えたのは9人で、中立（3）と答えた4人はみな中国人留学生であった。大勢の前で話すことが得意だ（5と4）と答えたのはマレーシア人の5人で、中立（3）と答えたのは中国人の2人だった。中国人留学生5人と、ベトナム人留学生1人は、強い苦手意識（2と1）を持っていた。留学生全員が知らない人の話を聞くことに積極的（5

と4)で、他の文化に強い関心(5と4)をもっていることが分かった。

3-2. 自己評価

2015年度より、毎回自己評価をさせることを始めた。毎週自分がどれだけ積極的にクラスディスカッションに参加し、スピーチに取り組んだかを、「聞く」と「話す」の二項目に分けて10段階で自己評価させた。自己評価のレベルは絶対評価であり、クラスメートのそれとの関連性はない。しかし、「話す」の自己評価のレベル(例:7/10, 8/10など)は、それぞれのスピーチの所要時間(例:00:59.26=0分59.26秒)と、正の相関関係にあることが分かった。目安の1分間スピーチで、1分30秒話せた場合は、1分以下の場合より自己評価が高くなる傾向にあった。受講生自身がスピーチの所要時間をはっきり把握しているわけではないが、フィードバックとして教師が伝える数値を、ポジティブに、あるいはネガティブにとらえ、それが自己評価に反映したものと考えられる。時間測定は、教員がストップウォッチを用いて行った。

「聞く」の自己評価では、日本人学生の平均値が7.8であったのに対し、留学生の平均値は8.2であった。出身国別では、マレーシア人グループ5人の平均値の方が、中国人グループ7人の平均値より高かった。しかし、これらのデータに有意差はみられなかった。さらに留学生を、N1既得と未得に分けて分析したが、やはり関連性を示唆する結果は得られなかった。

「話す」と「聞く」の自己評価における最高値は10で、最低値は4であった。「話す」の評価を4とした受講生2人(それぞれ1回ずつ)は、日本人学生と留学生で、当日体調が悪かった。「聞く」の評価を4とした学生は留学生2人で、それぞれ2回ずつ同じ評価をつけている。2人ともN1未得であった。この2人の場合、14週を通して4から6と、他に比べて低めの自己評価をしている。10段階評価の中間層の数値を選んでいることから、授業に対して消極的というわけではないことをアピールしているようにも解釈できそうだ。

留学生13人に対し、日本人学生はその半数以下の6人である。小グループを作るときは、1グループに日本人が1-2人となる。日本人学生の「聞く」の評価は、主に留学生の話を「聞く」ことに対するものだといえる。平均値7.8からは、留学生の日本語能力が日本人学生の聞き取りを妨げている状況は読み取れない。むしろ、日本人学生と留学生の間に、十分コミュニケーションが成立していると考えてよいのではないだろうか。

3-3. 振り返りレポート

振り返りレポートには、A4両面ワークシートの裏面下3分の1のスペースが充てられている。受講生はその日に初めて知ったことや感じたこと、考えたことなどを自由に記す。その日のディスカッションテーマについて、様々な感想をもったことがうかがえる内容となっている。以下は、2013年度、2014年度のレポートからの抜粋である。

思い出(中国人留学生が子どものころ、日本に対して抱いていたイメージ)

小さいころから反日の感情を植え付けられるのが怖いと思った。(日)

日本人(日本兵のイメージ)が怖がられていたなんて聞いて、悲しくなった。(日)

自分も、日本にくるまで「ちょび髭+眼鏡」が典型的な日本人男性の姿だと思っていた。(留)

中国では今でもテーマパークで日本兵の出てくる芝居をすると聞いて驚いた。(留)

自分にとって家族とは

〇〇人は、日本人より家族への思いが強かった。(日)

自分にとって家族とは親兄弟だが、〇〇人にとっては親戚みんなが家族なのだ。(日)

犬を食べることもあるのに、ペットの犬も家族だというのでびっくりした。(留)

結婚の条件

恋人と結婚相手は、別だと思う。(日)

結婚相手には、ある程度の経済力を期待する。(日・留)

真剣に付き合っている相手と結婚するのは、当然のことだ。(日・留)

みんな結構打算的だと思うが、それも必要だ。(日・留)

ふるさと紹介

〇〇国については首都がどこかくらいしか知らなかったもので、△△地方のことが知れてよかった。(日)

同じ国でも、北と南、西と東では、気候風土が随分と違うことが分かった。(日・留)

ふるさとを離れて日本・姫路市に来て、あらためて故郷の良さ・魅力を感じた。(日・留)

日本の大学生は勉強をしないといわれるが、よその国でもあまり変わらないようだ。(日)

大学生はオトナかコドモかという議論が面白かった。自分はコドモだと思う。(日)

大学生として身に着けるべきは自主性だ。みんな、オレ、しっかりしろよ。(日)

宗教について

宗教について今まで考えたこともなかったが、それは自分にとって損失だったのだろうか。(日)

コーランがスマホで見られることにびっくりした。(日・留)

信仰があるというのは素晴らしいと思う。(日・留)

いろいろなこと(衣類、食べ物)に宗教的意味があることを知った。(日・留)

日本・日本人について

国では日本人のことをよく思っていない人も多いのに、よく来てくれたと思う。ありがとう！(日)

日本にきて、財布を盗まれたのに、日本人全体を悪く思わない人は、心が広いと思った。1人の行動で、国全体を判断できない。(日・留)

今までずっと、なぜ日本人は本音を言わないのか、疑問に思っていた。まだ謎だ。(留)

日本人が「本音」と「建て前」を分けるというが、それは一種のステレオタイプではないか。(日・留)

3-4. 学生による授業評価

筆者の所属大学では、科目ごとに学生による授業評価のアンケート調査を行っている。集計結果は、担当教員に送付される。担当教員は、アンケート集計結果に基づき、教育活動自己評価および授業改善策をイントラネット上に発表する。調査項目は、以下の4つの項目に分類される16の質問からなる。

- 1) 教員の授業に関する基本的な質問
- 2) 教員の授業に関する姿勢についての質問
- 3) 授業の内容に関する質問
- 4) 授業に対する満足度に関する質問

このうち、項目3)と4)は、以下の質問からなる。

- ⑪ 授業の内容は、シラバスに示された内容を満たしている
- ⑫ 授業内容の説明は、わかりやすく、理解できる
- ⑬ この授業を通じて、新しい知識を得たり、物の見方や考え方が学べる
- ⑭ この授業に触発されて、さらに学習意欲を持つようになった
- ⑮ この授業を他の学生や後輩に推薦したいと思う
- ⑯ 総合的にみて、この授業を受講して満足している

2013年度、2014年度において、上記⑪から⑯のすべての質問に対し、支持率は80～95%であった。いずれも同形態の授業評価の平均値を上回っており、受講生が授業内容について満足し、達成感をもっていることが分かった。

2015年度の授業評価はまだ行われていないが、振り返りレポートおよび学生のフィードバックから、以下のコメントが得られた。

自分はそもそも口数が少なく、人と話すことは得意ではなかったが、授業でしかたなく話したり聞いたりしているうちに、苦痛でなくなってきた。(日)

人とアイコンタクトを取ることが苦手だったが、話すとき自然にクラスメートと目が合うようになった。(日)

自分は日本語がまだまだなので、みんなにちゃんと聞いてもらえるか、言いたいことが伝えられるか心配だったが、分かってもらえて安心した。(留)

最初は1分間も絶対に話せないと思ったが、案外すぐに時間をオーバーしてしまっていて驚いた。(日・留)

4. まとめ

この授業を受講するにあたり、日本人学生も留学生も、自身の日本語によるコミュニケーション能力に、少なからぬ不安を感じていたことは、事前調査からもあきらかであった。この授業を受講したことで、コミュニケーション能力がついたか、向上したかを、具体的に判断する術はない。しかしながら、クラス内ディスカッションを重ね、また自分が発表をするために考え、調べていくうちに、いろいろな文化があること、考え方、生き方があること、さらにコミュニケーションにも文化によっていろいろなカタチがあり、あってよいのだということを知り、それが自信につながったことが推察できる。

いろいろな文化に触れ、相互理解を深めるために、日本語コミュニケーション力を高めることを目指した授業構築の試みは、現在まで、大変順調に進んできていると言えるだろう。受講生それぞれが自分のコミュニケーション力に自信を持ち、人と向き合って話し合うこと、大勢の前で自分の考えを発表することに慣れてきていることは、大きな成果であるといえる。

今後も、その年の学生グループのニーズに合わせたテーマ選択を行い、学生主体の自律的授業運営を進めていきたい。

参考文献

- 沖塩有希子、益井岳樹、北本正章（2008）「社会科系教員養成の再検討（その1）：教員志望の基礎学力問題を
を中心に」『教育研究 52』142-175 青山学院大学.
- 田崎敦子（2003）「日本人学生の異文化間コミュニケーション能力の養成－英語を共通言語として行う留
生とのグループワークを通して」『留学生教育』7号:45-53 広島大学留学生センター.
- 長谷川和則（2007）「日本語コミュニケーション力を高める授業構築を目指して：日本人学生と
留学生が混在するクラスでのグループ活動の視点より」『静岡産業大学情報学部研究紀要 9』145
-178 静岡産業大学.
- 宮本美能（2011）「多言語・多文化授業環境を生かした国際理解教育の実践－大学生と高校生の交流会に
おける一考察－」『大阪大学国際教育センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第15号：61
-68.